

0. 問題の所在と本報告の主張

英米語の関係節と主節との関係は透明である。文中での構造が先行詞 Head Noun と関係代名詞 Relative Pronoun との接続により明白に形成されるからである。これとは対照的に、日本語の関係節である連体修飾節と主文の要素である修飾される名詞句との関係には不明の点が少なくない。

まず例文の(1)(2)(3)を見よう。【なおT1-(30)は寺村1992の例文の番号を示す】。

☆(1) 文子が坐ったうしろの窓には、もみじが青かった。 T1-(30)

☆(2) このごろ自分は、深酒をした翌日には、以前にも増してなさけない気分襲われる。
る。 T1-(33)

☆(3) あんな店で働いているおかげで、男の裏は全部知っている。 T1-(35)

(1)は従属節である連体修飾節の内容と主文の内容とが空間的な前後関係に立つ事例である。(2)は従属節と主文の内容が時間的な前後関係に立つ事例である。(3)は従属節と主文の内容が原因と結果という因果関係に立つ事例である。

これらはどれも寺村秀夫のいう「外の関係」に当たる事例である。「内関係」と「外関係」とは寺村によれば、次の様に区別される。例文の(4)(5)を見よう。

(4a) 君がそのとき聞いた足音 T1-(7a)

(4b) 誰かが階段を降りてくる足音 T1-(7b)

(5a) サンマを焼く男 T1-(8a)

(5b) サンマを焼く匂い T1-(8b)

それぞれ a は「内関係」を示し、b は「外関係」を示す例文である。(4a)は「君が(足音を)そのとき聞いた」という文の形に直せるし、(5a)は「(男が)サンマを焼く」という文の形に直すことができる。「内関係」では修飾される名詞句を修飾節の内部に取り込むと修飾節は文になる。

寺村は日本語の連体修飾を次の様にまとめている(T1 p202)。

a. 内関係。これは付加的修飾の場合であり(4a)や(5a)がその例である。

b. 外関係。これは内容補充的修飾の場合である。内容の補充を寺村は普通の補充と相対的な補充とに分類している。例文のうち(4b)や(5b)が普通の内容補充の例文である。(4b)では修飾節によりどんな足音かが補充されているわけだし、(5b)ではどんな匂いかにについて説明が補充されている。次に見る例文の(6)(7)(8)も普通の補充の例である。

(6) 漁師は、海上で水死人にであうと、これを〈流れ仏〉といい、漁運をさずけてくれるものとして、喜ぶ風習がある。 T III-(57)

(7) 大才ポップですら、梵語と馬來語との同系を論じて、見事に失敗した経歴もある。

T III-(69)

(8) 聖堂でも私は自分に与えられた影像にしたがって敬虔に祈るふりをしていた。

T III-(110)

どのような「風習」か、どのような「経歴」か、どのような「ふり」かを補う役割を修飾部が担っているという風に寺村は捉えているわけである。

さて普通の補充とは区別される相対的補充は、従属節の内容と主文の内容とが「相対性」とでも呼ぶべき意味特性を持つ関係に立つ。①②③の様に二つの事態が相対するかたちで結合される。

☆① 空間的な前後左右の関係：前←→後 / 左←→右 / 上←→下 / 横←→横/隣り←→隣り

☆② 時間的な前後の関係 : 前日←(当日)→翌日

☆③ 因果関係 : 原因←→結果 / 罪←→罰

先に見た例文の(1)(2)(3)はそれぞれに当たる例である。

以上、寺村秀夫による連体修飾節の種類を概観したが、続いて本報告で行う主張の説明に進むことにしよう。

本報告での主張は簡単である。すなわち「外の関係」とは Evidentiality を示す関係であると主張する。要するに「外の関係」とは Evidentialな関係のことである。言い換えれば命題と挙証の関係のことである。「外の関係」のうちでも普通の補充は命題と証拠の関係にある。本報告ではまずこの点を指摘し、更に時間の許す範囲で相対的補充にも触れるつもりである。さて(4b)(5b)(6)(7)(8)の例文は次の様な内容を表している。

(4b') 足音がする。この足音は「誰かが階段を降りてくる」証拠である。

(5b') 匂いがする。この匂いは「(誰かが)さんまを焼いている」証拠である。

(6') 漁師には「(漁師は)海上で水死人にであうと、これを〈流れ仏〉といい、漁運をさずけてくれるものとして、喜ぶ」ことを裏付ける/証拠である風習がある。

(7') 大才ポップには「(かれが)梵語と馬來語との同系を論じて、見事に失敗した」ことを示す/裏付ける/証拠である経歴もある。

(8') 「(私は)自分に与えられた影像にしたがって敬虔に祈る」という事実を裏付けるふり=偽りの証拠を捏造していた。

(8)の例は証拠が偽りの場合であるが、連体修飾節と主文との関係が事実と証拠との関係であることは明白である。

ところで、これまで「外の関係」を Evidential な関係として説明する試みは行われなかった。それは何故かと言えば、結局のところ、挙証性には二つの類型があることが全く見逃されていたからであろう。

1. 挙証性の二類型 Two types of Evidentiality

挙証性にはふたつの類型がある。ところがこれまでは Chafe1992 に見られる挙証性が Evidentiality の標準形とされて来た。Chafe1992の主張を極く掻い摘まんで紹介して置こう。

- (9) I feel something crawling up my leg. Chafe, ed. p263(1)
 (10) It's probably a spider. p263(2)
 (11) It might be a spider. p264(3)

Chafeは次のように語っている。

People are aware,, that not all knowledge is equally reliable(p264).
 知識の信頼度には段階があって、知識の信頼度に対する話し手の評価 (the speaker's assessment of its degree of reliability). を示す語彙があり、実際英米語の談話では maybe, probably, or certainly, Or might or may (in Conversational English) などが使
 い分けられている、と。

ところでChafeの説では、挙証性の proto-type はどの言語に求められるかという論点
 が明確には設定されていない。ここに問題が残されている。。この点を明らかにするため
 に、英米語とは際立って異なった Evidentiality の用法を発達させた Kashaya 族の事例
 を見て置くことにしよう。縦のコラムには Performative を別格として Factualに続き
 Visual, Auditory, Inferential, Quotative といった Evidential Marker の種類が層を
 成して連なっている。横の方向には 談話、物語、回想といった話のモードが並んでいる。

	Spontaneous	Responsive (with Suffix -m')	Narrative	Remote
Performative (Imperfective)	-wela	-wǎ	-yowǎ	-miyǎ
Performative (Perfective)	-mela	-yǎ		
Factual (Imperfective)	-wǎ			
Visual (Perfective)	-yǎ			
Auditory	-vnmǎ			
Inferential I	-qǎ			
Quotative	-do			
Inferential II	-bi-			

Performative の欄は自発と応答に仕切られ、応答の場合の Evidential markerは自発
 の場合とは異なって Factualや Visualの marker と同一であることが分かる。例文を挙
 げて置く。(Oswalt1986, pp35-36)。

- (S1) Performative-Imperfective: □qowa°q-wela → qowá·qala.
 'I am packing (a suitcase).' e → a/q(w)_.
 (S2) Performative-Perfective: □qowa°q-mela → qowáhmela.
 'I just packed.' q → h/___m, th, y.
 (S7) hú·? men sí - ya - m ta ?a.
 Yes. thus do - VISUAL - RESP. I.
 'Yes, I have done that.'

(S1)と(S2)が自発の場合の例文である。自発というのは言い出しなしいし呼びかけということである。要するに、自分が今行っている行為あるいは今し方行ったばかりの行為を自ら述べ立てる言い方である。

それに対して例文の(S7)は応答の事例である。話し手が自ら行った自分の行為でも、聞き手から見れば目撃という視覚に映じた事態であることを示す Marker が使われている。英米語の挙証性を推算型と呼ぶことにすれば、これとは対照的な Kashaya pomo族の挙証性は体験型と呼ぶことが出来る。体験の種類に応じて別の markers が使い分けられていることは明白である。様々の人間体験を主観的な確信度に応じて分類し序列を付けたものと言えよう。問題は次の点にある。即ち、どちらが挙証性の proto-type に当たるのか。また日本語の挙証性はどちらの type に近いのか。こういった論点がこれまで見過ごされて来たと言わねばならない。

2. 日本語の挙証性はどちらのタイプか

寺村1977(1992、p285)にせよ、Aoki1986にせよ、Chafe1986 のモデルに囚われている。しかしながら、仁田1979の指摘する表出型と訴え型に見られる人称制約から見ても日本語の挙証性は体験型に近いと言えよう。

(12) 僕/ *君/ *彼/ガ彼女ニソノ事ヲ伝エヨウ。

(13) 私/ *君/ *彼女/ハトテモ目ガ痛イ。

(14) 今度ノ研究発表ハ/ *僕/ 君/ *彼ガシテクダサイマセンカ。

(15) *私/ 君/ *彼/モ北海道へ行ッテミマセンカ

話し手は自分の意図や感覚については自分限りの体験であり自分だけが述べ立てることが出来るわけである。一方、聞き手の意向を問い応答を求める発言では相手の立場に立って相手の行為というか将来の行為についての相手の意向を言い表すことになる。

3. 相対的補充への拡張は可能か。

(3')「あんな店で働いている」ことの裏付け/証拠として「(おかげで)男の裏は全部知っている」という事実が持ち出されている。

(3')のように因果関係へは拡張が可能である。まず命題が提出され、次に証拠が持ち出される。原因が結果の裏付けとして持ち出されることもあるし、また逆方向に結果が原因の裏付けとして持ち出されることもある。

(1')(2')の様な時空の関係を示す例文にも適用可能か。日本語では、関連のある事実を並列してそれぞれ相対する事実の証しとする用法が発達している。

(2')「深酒をした」という事実を補強するために、その裏付け/証拠として「(翌日に)以前にも増してなさけない気分が襲われる」という体験を持ち出している。

(1')「文子が坐った」という事実を補強するために、たまたま同じ時空で生じた「うしろの窓には、もみじが青かった」という別の事実を裏付け/証拠として提出している。

そもそも寺村の指摘する相対の関係とは何か。どうやらそれは広い意味での因果関係を示す概念である模様である。但し、この場合には、因果関係という概念そのものの見直しが必要になる。

4. 残された問題。カテゴリーの拡張は可能か？

因果関係には実は通時的と共時的との二種類の因果関係がある。

通時的な因果関係とは一方向的に到着目標に向かう一神教的な時間において成立しやすい因果関係の概念である。戻りたい、でも戻れない。ここでは時間の流れは不可逆的である。一方、共時的な因果関係は、時間の流れを刹那に切断してしまう仏教的な時間において成立しやすい因果関係の概念である(立川1999、pp128-130)。同時的ないし刹那的な因果関係といってもいい。こちらでは一瞬一瞬の刹那に切断された時間を重ねかつ束ねて集積して行くという微分積分的な時間概念が必要になる。

ところで刹那において何が生じるのか。磁力を事例に考えて見よう。磁石のN極とS極とは互いに引き付け合うし、同じ極同士では互いに反発しあう。互いに引き付け合う相互作用と反発し合う相互作用がそこには見られる。特に引き付け合う相互作用の場合には刹那において同時に存立する二つの要素が引き付け合い複合体を形成する。それぞれの複合原因が複合体である原因複合を生成する。原因複合はここでは結果である。

どちらの因果関係においても原因は結果を産出する創造の力を持つ。原因は永遠の循環である永劫回帰を突き破ってその外に超出=跳出する力を持つ。原因を生み出す力は神秘の中にある。さて共時的な因果関係においては複合体である原因複合が因果関係における新たな第一原因となり、新たな原因と結果の連鎖を開始する。複合原因の片割れが原因複合の証拠となり、原因複合が複合原因の他の片割れの証拠となるという関係である。

共時的な因果関係とは別々の出来事が「ところ」という同一の時空で発生したことを伝えるカテゴリーであり、日本語にはこうした関係を表す語形が見られるということである。

《参考文献》

- 立川武蔵1999「仏教における時間」『時間・ことば・認識』長野泰彦編、ひつじ書房
寺村秀夫1992「連体修飾のシンタクスと意味」(『寺村秀夫論文集 I』所収)
寺村秀夫1992『寺村秀夫論文集 I』くろしお出版
仁田義雄1979「日本語文の表現類型」林栄一還暦論集『英語と日本語と』くろしお出版
蓮沼啓介1984「情報革命と日本語学」日本語学(四月号)
Chafe, W. 1986. "Evidentiality in English Conversation and Academic Writing"
Oswalt, R. L. 1986. "The Evidential System of Kashaya" in EVIDENTIALITY.
Wallace Chafe ed. EVIDENTIALITY: The Linguistic Coding of Epistemology. 1986.